を獲得して研究を継続していくためにはかなり頑張らないといけなかったですね。

　成果を出すことはもちろんですが、客観的な評価とは別に、自分なりにステップ・バイ・ステップでここまでやってこられたこと、そして次へ繋げられるようになってきたことが、私にとって大きな喜びです。

自分で考えること

市長　現在市では、将来の長浜を担う理系人材を育んでいこうと、長浜バイオ大学と連携して「長浜学びの実験室」という事業に取り組んでいます。

　市内の小・中学生が教授や学生から直接講義や実験の指導を受け、高度な電子顕微鏡などを使いながら学習しています。理系離れが進んでいるといわれる昨今ですが、子どもたちがワクワクしながら実験に取り組んでいる姿を見ると嬉しいものです。

坂口　教科書にある知識を頭に放り込むのではなく、実際に顕微鏡を覗いて特徴を探したり、細胞の構造を確かめたりなど、子どもたちが本物や実物に触れ、興味を持つことは本当に重要だと思っています。

　テレビやインターネットで情報は手に入りますが、長浜には湖もあれば山もある恵まれた環境ですから、動物でも植物でもいろんな興味を持って自然に接してほしいと思います。何事もそうですが、やればやるほど興味が湧きますし、その分面白くなってくると思うのです。

市長　興味が湧いてくると、様々な疑問が湧いてきて、それが一つのことを探求する原動力となるのでしょうか。

坂口　そうですね。物事に疑問を持つには力が要りますし、疑問を問題に練り上げるにはさらに力が必要です。

　例えば、なぜ他人の臓器は拒絶されてしまうのかとか、なぜ自己の中で生まれたがん細胞にうまく免疫反応が起きないのかといった疑問が出てきますが、免疫反応はどうやって起きていて、何をどうすれば起こすことができるのか、具体的に検証できる問題に練り上げるには力がいる。だから、本当に身につくというのは、やはり自分で考えて自分の中でそれが操作できるというところまで理解できるということが重要だと思います。

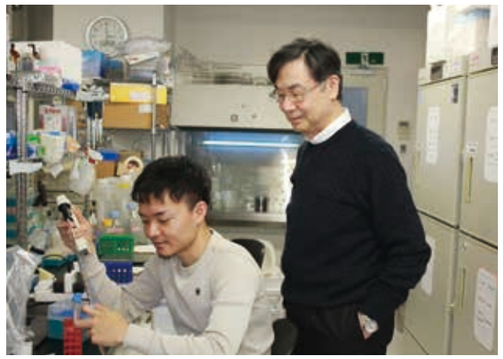
市長　先生の研究の功績は、「自分で考えること」から生まれているんですね。知識が簡単に手に入るようになった現代では、自分で考えること自体が減っているのかもしれません。

坂口　日本で初めてノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹さんは自伝の中で、「自分を納得させるために研究をしているのだ」とおっしゃっています。

登り坂を一つひとつ

　私自身考えてみますと、大学受験に失敗して自宅で浪人していた時、分からないことがあると自分で考えざるを得なかったので、後々考えると、あの一年間自分一人で勉強したことが、自分でものを考えるということが身につくきっかけになったかなと、と今は考えています。

市長　制御性T細胞を発見してからも、先生の挑戦は続いていくのでしょうね。今後はどのような展望を描いていらっしゃいますか。



▲実験室での研究の様子

坂口　米国や欧州では、制御性T細胞を使った治療も始まっていますので、日本でも研究の成果を実際の医療の現場で活かしたいというのが当面の目標です。あと10年働けるとして、どこまでたどり着けるか、ですね。若い研究者のみんなにも期待しています。

市長　先生の発見が世界中の多くの命を救うということは、私たち長浜市民にとってもこの上ない喜びです。先生の持ち前の粘り強さで、必ずや目標を成し遂げられることを信じています。

　若者たちの活躍には私も注目しています。そして、「地方の時代」といわれる今、私が期待しているのが、長浜市民に根付く「協働の精神」です。先生のお話を伺って、まちづくりにおいても「自分たちで考える」という姿勢が、まちとしての力をつけていくことに繋がっていくのだと確信しました。

　未来の長浜を担っていく若い人へのアドバイスをいただけますか。

坂口　趣味でも仕事でもいいので、自分が面白いと思えるものを持続的に取り組んでみてほしいです。いつも少し登り坂くらいのつもりで継続して、後々気付けば自分なりにやり遂げたなと振り返れるような人生だと素晴らしいですね。

　そして、そう慌てる必要はないので、自分でじっくりと考えることでしょうか。私自身、「一つひとつ」と毎日つぶやきながら、自分に言い聞かせています。

市長　「一つひとつ」、とても大切なことですね。自分で考え地道に積み上げてこられた先生の姿そのものだと思います。

　私の座右の銘は「至誠通天」です。少子高齢化や人口減少の加速、そしてコロナ禍という、かつて経験したことがない困難に直面している今、いかにしてまちに活力を生み出していくかが問われています。全ての市民が幸せに暮らせる長浜市を築くため、誠を尽くし、全身全霊取り組んでまいります。

坂口　長浜が元気なまちになっていくことは、私の願いでもあり、誇りです。これからもふるさと長浜を想い、応援しています。